

れんげの遅まきによるアルファルファタコゾウムシの耕種的防除							
[要約] 蜜源れんげにおけるアルファルファタコゾウムシの発生と被害を遅まきにより、耕種的に抑制できる。							
生産環境研究所・病害虫部・普通作物病害虫研究室					連絡先	092-924-2938	
部会名	生産環境	専門	作物虫害	対象	牧草類	分類	普及

[背景・ねらい]

アルファルファタコゾウムシは福岡県では1982年に侵入が確認されたが、1988年頃かられんげで著しい被害が発生している。れんげは重要な蜜源であり、蜂蜜は健康食品であることから、農業に依存しない防除方法の確立が求められている。9月下旬～10月上旬播種の慣行栽培のれんげ圃場は本種成虫にとって好適な侵入、越冬場所および翌春の繁殖場所を提供していると考えられる。そこで、遅まきによりれんげの生育量を制限した場合、どの程度発生と被害が抑制されるかを検討する。

[成果の内容・特徴]

- ①アルファルファタコゾウムシによるれんげの被害は、遅まき（12月2日播種）によりほぼ完全に抑制でき、9月下旬から10月上旬播種の慣行栽培ではれんげは激しい被害を受ける（図3）。
- ②遅まきによって、休眠明け成虫の圃場への侵入量が減少し、その結果、卵密度が顕著に低下する（図1）。卵密度の低下にともない、幼虫密度と開花盛期（4月下旬～5月上旬）の被害程度が顕著に低下する（図2、図3）。
- ③遅まきでは、開花最盛期は標準まきに比較して約2週間遅れるが、開花数及び訪花ミツバチ数の減少は認められない（データ略）。

[成果の活用面・留意点]

れんげを遅まきすると発芽率の低下や雑草との競合による発育不良が生じやすいため播種量を標準まきに比べて50%程度多くし、耕起する必要がある。

[具体的データ]

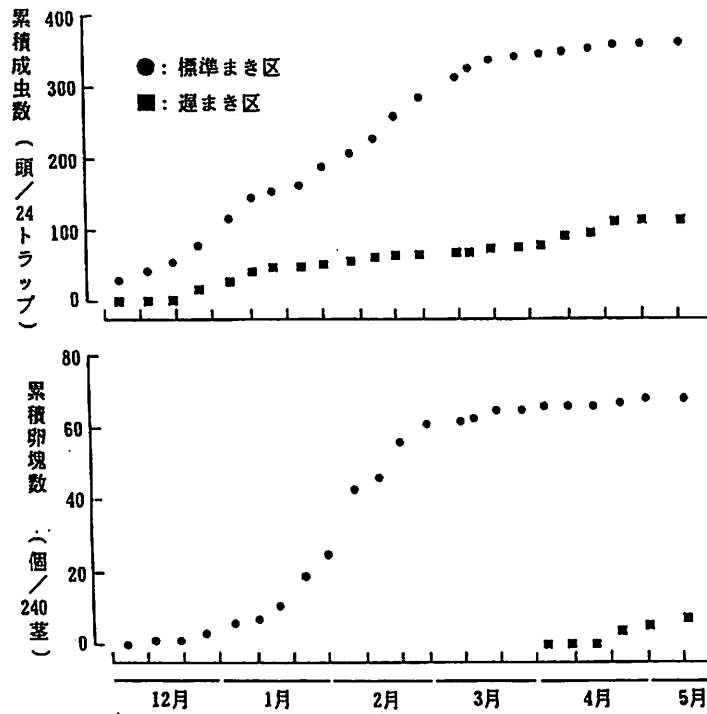


図1 レンゲの播種時期による成虫及び卵発生消長の相違

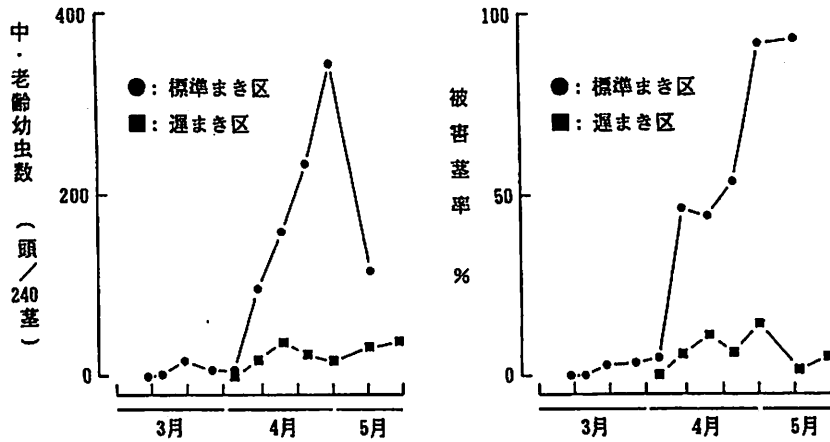


図2 レンゲの播種時期による幼虫発生消長の相違 図3 レンゲの播種時期による被害消長の相違

[その他]

研究課題名：蜜源れんげにおけるアブラムシの発生生態の解明と防除法の確立

予算区分：経常

研究期間：平成4年度（平成2～4年）

研究担当者：嶽本弘之、中村利宣

発表論文等：平成4年度生産環境研究所病害虫部普通作物病害虫関係試験成績概要書